



TITLE:

序『カラム』の時代 IX --マレー・ ムスリムの越境するネットワーク 2

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. 序『カラム』の時代 IX --マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2. CIRAS discussion paper No.78: 『カラム』の時代 IX --マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2 2018, 78: 4-8

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_78_4

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

序『カラム』の時代IX

マレー・ムスリムの越境するネットワーク2

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(Qalam)』とそれを取りまく同時期の東南アジアのムスリム社会の動態に関する論考をまとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の9編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去8編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス(Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化

とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。

1) 『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシんでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げた。彼の伝記として[Talib 2002]がある。

3) 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本2002a: 263]。

『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集成したうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学東南アジア地域研究研究所(旧京都大学地域研究統合情報センター、以下京大地域研と略記)の共同研究「東南アジアの国民国家の形成過程における民族・宗教の対立(研究代表者:坪井祐司)」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で8年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築と『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室などにおける資料収集により、『カラム』の全228号を収集した。そして、京大地域研が進めた雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面のデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開された⁶⁾。

ただし、この段階では、ローマ字による記事見出しの検索のみで、記事本文の検索はできなかった。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア(Klasika Media)社との提携により、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである⁷⁾。この作業は2016年に完了し、その成果をもとに翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せる「カラム雑誌記事データベース」が構築され、一般公開された⁸⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊と

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照(<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/index.html>)。

6) http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM

7) 翻字の作業は、『カラム』以外のジャウィ雑誌についても進められている。2017年には、『ジャウィ雑誌復刻シリーズ(Jawi magazine reprint series)』として、『ワルタ・ジェナカ(Warta Jenaka) vol.1, 2]、『カナ・カナ(Kanak-kanak)』、『ペレダラン(Peredaran)』の3編が翻字・復刻された。

8) <http://majalahqalam.kyoto.jp/>

なるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁹⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である¹⁰⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2)『カラム』共同研究

プロジェクトのもう一つの柱は、『カラム』のデジタル・アーカイブを利用した共同研究である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心にもとづいて『カラム』やその他の同時代資料の分析を行い、年に3回程度の研究会を開催して議論を行っている。その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが9編目となる。本編の内容については次節で紹介することとしたい。

2017年度の共同研究では、これまでの『カラム』研究の蓄積を踏まえつつ、同誌とその言説を同時代の東南アジアのムスリム社会全体の文脈へと位置付けることを目的とした。このため、『カラム』以外のイスラム運動や出版物の資料もまじえて1950、60年代の東南アジアのムスリム社会の動態を総合的に分析することを目指した。とくに、『カラム』の論説が主に対象としたマラヤ・シンガポールにくわえて、インドネシ

アにも視野を広げることを重視した。この作業を通じて、脱植民地化の過程において各地でさまざまな民族・宗教の対立に直面しながらも、その社会的危機の克服のため、ムスリムが様々な形で統合を模索した時代性をうかがいあがらせることが可能になると考えたためである。

同時に、プロジェクトでは、『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアやシンガポールにおける共同事業や成果の発信に努めている。2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の復刻版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業は、マレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書館(Dewan Bahasa dan Pustaka)とも提携して行われることとなった。それとともに、本プロジェクトはこれまでに年1回程度マレーシアにおいて『カラム』に関する研究成果を報告するワークショップや学会セッションを開催してきており、成果の国際的な発信も行っている。2016年10月～2017年6月にシンガポールのマレー・ヘリテージ・センター(Malay Heritage Centre)が開催したジャウィ定期刊行物に関する展示「発言者の創造:1920～60年代のマレー近代性の印影(Mereka Utusan: Imprinting Malay Modernity 1920s - 1960s)」では、企画段階から協力を行った。

プロジェクトでは、今後ともマレーシア、シンガポールの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集は、論文4編と『カラム』に関する資料編からなっている。以下、内容を簡単に紹介したい。

坪井祐司『『カラム』からみたマラヤの脱植民地化』

坪井は、1950～60年代のマラヤに関する『カラム』の記事の分析から、シンガポールのマレー・ムスリム知識人の視角を再検討した。『カラム』は、一貫してイスラムを通じたマレー人の統合を主張し、マラヤ、イ

9) データベース化が進められている雑誌の詳細については、[山本編 2010a: 6]を参照。

10) <http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>

インドネシア、シンガポールといった国家の指導者を批判した。ただし、『カラム』の主張は、マラヤの政治・宗教指導者への批判という点では急進的であったが、近代主義的な価値観は彼らと共有しており、近代国家の制度的枠組みを利用する形でムスリムの地位を向上させようとした。植民地からの独立という政治秩序の変化の過程でさまざまな国家構想が交錯するなか、『カラム』は華人や共産主義に対抗するためにマレー・ムスリムの広範な統合構想を模索した。その主張には、一面では矛盾も含まれているが、状況に応じた柔軟性、穏健性を示すものであり、同時代のマレー・ムスリムの最大公約数的な見解を代表するものでもあった。

光成歩「花嫁の自立——ナドラの結婚からみる 1950年代シンガポールの女性の地位」

光成は、戦時中ムスリム女性に引き取られたオランダ人少女(ナドラ)の改宗と結婚をめぐる問題を契機とした女性の地位をめぐる法制と議論をとりあげた。マレー系の左派の活動家チェ・ザハラ、『カラム』の主筆エドルス、インド系の法律家アフマド・イブラヒムの三人の活動に注目し、彼らの言説を通じて1950年代シンガポールのムスリム女性の社会的地位の変遷を検討している。幼児婚(女性の結婚年齢)や強制婚をめぐる議論の展開を通じて、婚姻締結におけるムスリム女性の権利が強調された。1950、60年代の一連の法制改革を通じて婚姻の下限年齢が定められるなど、婚姻における女性の主体性が強調されるようになった。これは、新しい女性像の模索の過程でもあった。ナドラの結婚は、脱植民地化期の急速な社会変化のなかで、社会における女性の位置づけをめぐる問いと相克とを先駆けて体现していた。

山本博之「アブドゥッラー・バスメーの経歴」

山本は、『カラム』の編集に携わり、シンガポールのムスリム同胞団の結成と活動においても重要な役割を担ったアブドゥッラー・バスメー (Abdullah Basmeh) の経歴について論じた。アラブ系でメッカ生まれのバスメーは、マラヤに移住し、シンガポールでジャーナリストとなった。その後マレーシアに移って多くの宗教書の翻訳や執筆を行い、今日でも高い評価を受けているウラマーとなっている。しかし、バスメーは正規の宗教教育を十分に受ける機会がなく、自分でアラビア語やマレー語の本を読み、後にはアラビ

ア語の記事をマレー語に翻訳することを通じてイスラム教についての理解を深めていった。このような経歴を辿った人物が社会において重要な役割を担うことができたという意味で、『カラム』が刊行されていた1950年代から60年代にかけての時期は、カラム(筆)すなわち知識と言論が力を持つ「カラムの時代」であった。

野中葉「マレーシアのダアワ運動と高等教育機関の イスラーム化に対するインドネシアの インパクト——インドネシア人活動家 イマドゥディン・アブドゥルラヒムを事例に」

野中は、1970年代初頭、インドネシアの大学ダアワ運動の初期の拠点だったインドネシアのバンドゥン工科大学からマレーシア工科大学の前身(ITK)に派遣されたイマドゥディンのマレーシアでの活動を論じた。バンドゥン工科大学の講師でダアワ運動のリーダーだったイマドゥディンは、教員が不足していたITKに派遣され、自身が専門とする電気工学を教えながら、イスラームの科目化の実現にこぎつけた。そして、大学内外で学生たちに対し、ダアワのトレーニングを実践した。1970年代初頭、マレーシアの高等教育機関が直面していた課題は、それより少し前の時期にインドネシアが直面したのと同じものであり、インドネシア人教員を受け入れることで、マレーシアの大学改革にインドネシアの経験が生かされていった。両国のムスリムエリートの民間レベルの交流と協働は、開発の時代における両国のイスラーム化の萌芽を示している。

資料編：「千一問」試訳

コラム「千一問」は、『カラム』に毎号掲載されていた名物コラムで、読者から投稿された質問に関するQ&Aコーナーであった。本編では、過去2編からの続編として、第36号(1953年7月)～第60号(1955年7月)の「千一問」の試訳を掲載している。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、その位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の4編の論考から浮かび上がる『カラム』とそれを取りまく東南アジアのマレー・ムスリム社会の位置づけ

について、簡単に記してみたい。

本編の論考は、前号から引き続いて、『カラム』をとりまく越境するムスリムの多様なネットワークを明らかにするものである。『カラム』自体が越境者によって作られた雑誌であった。主筆エドルス、山本がとりあげたアブドゥッラー・バスメーはアラブ系であり、シンガポールに移住し、マレー語雑誌『カラム』の出版に関わった。光成が扱ったシンガポールの女性をめぐる議論でも、インド系のムスリムが影響力を持っており、野中はインドネシア出身者がマレーシアの国家制度におけるイスラム化に与えた影響を指摘している。国民国家の建設過程には、こうした国家の枠を越える人のつながりが見られるのである。

それとともに、多民族社会の中で、そのネットワークが非ムスリムのコミュニティと複雑に絡み合っていることも指摘できる。坪井は『カラム』の主張が他の民族や国家との関係性の中で変化しながら形成された点を明らかにしている。また、コラム「千一問」からは、ムスリムの日常的な生活におけるさまざまな関係性が浮き彫りとなっている。一見均質な国家建設の過程では、そうした不均質な社会におけるネットワークが重要性を持っていたのである。

本編が扱った1950、60年代は国民国家の形成期であり、研究関心が国家及びその中枢を担った人々に集中しがちである。一方、山本が指摘するように、この時期は植民地権力が力を失うなかで脱植民地化を目指す多様な言論が交錯し、非政府の知識人の影響力もまだ大きかった。その後の70年代以降の「イスラム化」を通じて、各国政府は宗教の取り込みを図ることになるが、この時代は国家建設の傍らで独立以前から培われた多様なネットワークが併存する時代であったといえよう。

参考文献

Kanak-kanak (Jawi Magazine Reprint Series 2) (CIRAS Discussion Paper No.74), 2017, compiled by Hiroyuki Yamamoto, transcribed by Jawi Research Society in Japan.

Peredaran (Jawi Magazine Reprint Series 1) (CIRAS Discussion Paper No.73), 2017, compiled by Hiroyuki Yamamoto, transcribed by Jawi Research Society in Japan.

Talib Samat. 2002. Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan

Pendakwah. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Warta Jenaka 1 (Jawi Magazine Reprint Series 3) (CIRAS Discussion Paper No.75), 2017, compiled by Hiroyuki Yamamoto, transcribed by Jawi Research Society in Japan.

Warta Jenaka 2 (Jawi Magazine Reprint Series 4) (CIRAS Discussion Paper No.76), 2017, compiled by Hiroyuki Yamamoto, transcribed by Jawi Research Society in Japan.

坪井祐司、山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編 (CIAS Discussion Paper No.19)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計 (CIAS Discussion Paper No.23)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2013 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成 (CIAS Discussion Paper No.32)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2014 『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司、山本博之編 2015 『『カラム』の時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活 2』(CIAS Discussion Paper No.53)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編 2016 『『カラム』の時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践 (CIAS Discussion Paper No.62)』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編 2017 『『カラム』の時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク (CIRAS Discussion Paper No.68)』京都大学東南アジア地域研究研究所。

山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20、pp.259-343。

山本博之 2002b 「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方: 20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』20、pp.359-382。

山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究統合情報センター。